

(研究ノート)

動物利用についてのポストコロニアル分析の試み

— 19世紀アメリカの毛皮取引と大平原部族の変容を取り上げて —

白石(那須)千鶴

キーワード

動物論 ポストコロニアリズム ジェンダー 生権力 大平原先住民部族

はじめに

今日アメリカ社会で最も活発に論じられている動物論は、白人中産階級を中心とする動物擁護論、倫理的菜食主義の流れから、英米に特有な動物権利論が中心となってきた。しかし他方において、動物の問題が、国や地域を超えて共有される問題となる場面の多い今日、その動物論の主張には多文化主義的観点が欠落しているというグローバルな議論としての致命的問題を指摘せざるを得ない。そこで本稿は、アメリカをはじめとする西洋社会および西洋哲学において議論されている動物論への新しい視座を提示することを目的とする。

動物問題の議論において、1970年代後半にオーストラリア出身の倫理学研究者ピーター・シンガーの唱えた動物の解放論は、今日においても大きな影響力を持っている。シンガーが唱えたことを要約すると、人間に特有だといわれてきた「人間性」、すなわち自己意識や感覚性などの特性が人間だけでなく動物にも見出せることから道徳的配慮の対象を動物にも広げようというものであった。この主張は、逆に自己意識や快苦の感覚の獲得が将来にわたっても見込めない重度の障害新生児に対する積極的安楽死を肯定する議論につながり、動物への配慮の拡大が人間への新たな差別を生み出すという致命的問題性を抱えたものであるとして、多方面から批判を受けた。ユダヤ人である彼自身がドイツの公演ではナチズムだと非難されボイコットされた一件は、しばしば言及される出来事である¹。彼の議論に対する批判は、しかし動物擁護論の外からだけでなく、内部からも出され、新たな議論の可能性が期待された。それは、動物擁護をフェミニズムの観点から唱える論者たちの議論である。シンガーをはじめとする「動物の権利」論者たちへの彼女たちの批判は、「動物の権利」論やその運動にジェンダーの観点が欠落している為に、「動物の権利」を主張する代わりに、女性への劣位化がその運動に見られるという批判である。彼女たちは、動物と女性がともに救済される運動でなければならないと強く主張し、ジェンダーバランスのとれた、女性の地位向上と同時に実現する動物擁護論として、ケア重視の菜食主義の必要性を提示している²。

彼女たちのこうした批判は、従来の動物解放論やその運動の持つ暴力性への鋭い批判として重要な意味があることは評価できる。しかし彼女たちの「動物に配慮するフェミニストの菜食主義」と

しらいし(なす) ちづる：淑徳大学 兼任講師

いう主張は、そこに白人中産階級女性の出自を読み込み、次のような主張へと展開していった。すなわち「動物に配慮する倫理的菜食主義は、白人中産階級女性のアイデンティティである」とする議論である³。動物擁護に白人性を表明した理由としては、次のことが考えられる。自らの主張のローカル化、すなわち菜食主義を、独自の食のスタイルであるとする中で、その行為を他者には強要しないという姿勢の表明ともとれる。

しかしながら動物への配慮の議論を、生得的かつ経済的に規定される特定の集団の議論に限定することは、少なくとも次のような三つの新たな問題を派生させることが指摘できる。一点目は動物擁護の運動の排他性を強めることにつながる点、二点目は、動物と女性の両者の救済の為だとしながらそこに白人性を議論することは、西洋のフェミニズムが非西洋の女性すべてを救済できないというフェミニズム全般が受けている批判を何ら解消するものではない点、さらには、倫理性の高さを白人のアイデンティティと結びつけて強調することは、新たな白人至上主義になりかねないという危惧さえ感じられる、という三点である。すなわち、動物の問題がグローバルな問題として派生している今日状況に対し、白人性を強調するこのフェミニストの動物擁護論には、公平な問題解決能力の期待はできないと言わざるを得ない。これは、彼女たちが問題とした動物や女性への抑圧が、実はもっと大きな構造の中の抑圧、すなわち植民地主義的帝国主義的暴力として作用し、非白人、先住民に対しても向けられて行使されていたのではないかとする想像力が欠如している為ではないかと危惧される。そこで本稿は、19世紀のアメリカ大平原での毛皮取引がもたらした問題を取り上げ、バッファローと先住民の暮らしの関わりの変化を、ポストコロニアリズムとジェンダーの観点から再検討し、新しい動物論の方向性を提示しようというものである。19世紀以降、ヨーロッパ系白人主導のアメリカ社会で展開した動物利用が、大平原先住民らをどのように巻き込んでいったのか。先住民たちはどのような形でその変化の波に対応していったのか。こうした先住民と動物の関わりから見えてくる問題を通して動物論の新たな視点の必要性を論じたい。

I. 19世紀北米大平原部族と動物の関わりの変遷——毛皮交易への参入の影響から

アメリカ大平原の遊牧部族の生活は、19世紀後半のバッファローの激減とともに根底から閉塞させられ、最終的には小さな居留地での暮らしを余儀なくされている。西部開拓が、馬に乗ってバッファロー狩りをする遊牧部族の暮らしを崩壊させたというそうした歴史は、しかしながら彼ら大平原部族の伝統的な暮らしの中では、変遷の最後の一コマに過ぎない。彼ら大平原部族の暮らしの激変は、馬の入手、伝染病の襲来、そして定住生活の放棄を経て、毛皮交易への参入というヨーロッパ系アメリカ人による環境および経済との大掛かりな関わりの中で展開した激動の変化であったことを踏まえる必要がある。すなわち欧系生物相と欧系経済がいかにして先住民部族の暮らしに侵入し政治的征服を果たしていったかについては、大平原部族の遊牧生活の採用の背景から検討する必要があるだろう。

2 アメリカの大平原部族については、アラパホ族、アシニボイン族、アトシーナ族、ブラックフィート族、シャイアン族、コマンチ族、クロー族、カイオワ族、スー族等の少なくとも9部族について最近の研究で詳述されている。広い大平原に分散するこれら9部族の暮らしの変化は当然のことながら時間的ずれもあり、変化への対応も必ずしも一様ではない。しかし共通していえる特徴には、どの部族もヨーロッパ人の到来以前には馬を保持していなかった点、およびエコロジカルセーフティネットシステム⁴と研究者たちが命名した複数の生活の糧を採用する生活スタイルを持っていた点があげられる。例えばコマンチ族は小動物の罨猟、漁撈、野生の実やベリーの採集など、狩猟、採集の生活方法を季節によって使い分ける暮らしをしていた。スー族と呼ばれた部族も様々な植物、

動物の採集、狩猟を行う生活を営んでいたことが今日明らかにされている。すなわち、その後バッファローを専門に狩猟民族になる大平原部族にとっても、馬が到来するまではバッファローが生活の中で占める割合はほんの僅かに過ぎなかったのである⁵。

馬がアメリカ大陸にもたらされたのは1519年だと一説には言われている。北アメリカに馬が到来するのはさらに100年以上経過した1600年に入ってから以降のことである。17世紀の終わり頃までにプエブロ族に伝わり、18世紀の初め頃にコマンチ族にプエブロ族から交易で馬がもたらされたのが大平原部族で馬を獲得する先駆けであった。その後、ブラックフィート族、クロウ族、スー族へと広がっていき、18世紀中頃には大平原北東部の部族にまで馬が広がっていったとこれまでの研究成果から示されている。この馬の到来、採用が大平原部族に、バッファロー特化の遊牧生活の採用と白人との毛皮取引への参入という生活の激変をもたらしたのである。しかしそこへ行き着く前にもうひとつ、彼らの暮らしに影響を与えた重要な出来事として伝染病の蔓延についても言及する必要がある。

長い間他の大陸から隔離された状態で暮らしてきたアメリカ大陸の先住民を、ヨーロッパからの伝染病が襲いかかり膨大な数の人々が命を落としたことは、例えばニューイングランド地方の環境と先住民についてのR.クロノンの先駆的研究でも分析描写されている⁶。大平原の地域に伝染病が猛威を振ったのは18世紀に入ってからのことである。その地域でのとくに大きな影響を与えた天然痘の流行は、1780年から始まったものと、1800年からのものがあげられる。1780年からの大流行は、少なくとも2年続き、ミズーリ川流域の定住農耕部族に壊滅的被害をもたらした。この天然痘の流行する以前の1770年代にはトウモロコシなどの栽培も行っていたシャイアン族やスー族は、1780年代には農耕を捨てて遊牧生活へと暮らしの形を変えていったことがこれまでの研究から指摘されている⁷。1800年頃から始まった流行も先住民部族に破壊的影響をもたらし、例えばオマハ族はその後、遊牧生活へと暮らしを変えていった。こうした伝染病の脅威は、大平原部族の間での力関係のバランスにも影響を与え、農耕部族より遊牧部族の勢力が増していったという指摘もなされている。このように、伝染病の猛威から逃れる術として、遊牧生活が選択されたとみることが重要だと思われる。伝染病は、定住して暮らす先住民部族を容赦なく襲い、壊滅的被害をもたらすものであった。その脅威から逃れる為に、遊牧生活を採用することは、部族民を伝染病の脅威から守り抜く重要な戦略だったと言えるであろう。しかし同時に伝染病の蔓延により、農耕、採集、狩猟の複数を採用する生活形態の継続が不可能となったのである。

この伝染病からの回避が白人との交易の大きな理由となったことは、クロノンやホワイトらの研究でも指摘されているが、大平原部族の場合は、伝染病だけが毛皮取引開始の理由ではないという指摘も最近の研究で示されている⁸。すなわち馬に乗ってバッファローを狩猟する騎馬型狩の採用により、バッファロー狩りでの馬の有用性が増して行ったことと馬の入手の為に交易の必要性が増したことなども影響したことが指摘されている。これは、当時の大平原北部地域の部族にとって、馬の繁殖が不可能であったことから、馬を継続的に保持する為に部族間交易がさらに不可欠なものになったという事情があると考えられる。毛皮取引への参入の背景には、伝染病の猛威に加え、遊牧の採用、馬の獲得の必要性、その為の狩りの効率向上の必要性、などの事情があったことに気づくことが重要であろう。

大平原地域に白人の毛皮取引を持ちかける蒸気船が最初にミズーリ川上流にやってきたのは1810年代末のことであった⁹。しかしその時から即座にその地域の部族民たちが毛皮取引に参入した訳ではないという指摘も重要である。そもそも白人との取引に対しては、先住民の側に非常に大きな警戒心があったことが伺える。例えばルイジアナ地方を1804年から2年かけて旅をしたルイスとクラ

ークらの探検日誌にも記されているスー族の交易への妨げ行為からも見て取れる¹⁰。あるいは、すべての部族が毛皮取引に参入した訳ではないことも指摘されている。例えばロープ取引を持ちかけられてもポーニー族は拒絶していたことがホワイトの研究では論じられている¹¹。しかし他方において、バッファロー狩りに専念し白人との毛皮取引に参入した部族の中には、一時期繁栄していったものも存在した。

遊牧部族にとって、バッファロー狩りに専念することは交易に欠かせない毛皮の獲得効率を高める戦略的選択だった側面もある。彼らは、バッファローのすべてを利用する生活様式を生み出していった。1865年当時のある白人旅行者の記述では、食料としてバッファローの肉を利用するだけでなく、皮、角、骨、蹄、腱、胃袋、さらにバッファローの糞など、先住民がバッファローのすべてを利用する生活が記述されている¹²。こうした暮らしは、ある探検家に「最も自律したインディアン¹³」と評されもした。また「ソーラーエコノミー」と評した最近の研究者もいる¹⁴。しかしこの暮らしは、他方においてバッファローがいなければ、飢えの危険に見舞われるバッファロー依存の暮らしとも言える。しかも、実はバッファローを専門にして狩猟をする遊牧生活は、先住民部族の内部にも次のような変化をもたらしたのである。性別役割分業の変化、そして一夫多妻の増加である。

馬を持たない時代のバッファロー狩りのスタイルは、男性だけでなく、女性も子供も総出でバッファローを徒歩で追い込んで捕らえる方法がとられていた¹⁵。馬に乗って狩りをするようになると、狩猟は男性の仕事となり、女性が狩りから締め出されたことが指摘されている。男性たちによって仕留められたバッファローの肉の処理や毛皮ロープのなめしその他のバッファロー加工品の作成作業が女性たちの仕事とされたことが、当時の旅行者や探検家、あるいは白人捕虜の手記などから示されている¹⁶。白人との交易が盛んになりロープ交易が増加するに従って、女性のロープ加工の労働の重要性が増すと同時に一夫多妻も増加し、女性の結婚年齢の低下も進んだことが指摘されている¹⁷。こうした状況の中で女性の経済的自立性が低下していき、最終的には女性の地位の低下にもつながったと論じる研究もある¹⁸。

こうした変化を見せながら、白人との毛皮交易は、1800年代から1830年代までは勢いを増していった。1825年から1830年にニューオリンズの港から785,000頭分のロープが運び出されたと論じている研究もある¹⁹。このように多数の毛皮ロープが白人との交易で取引されるに従って一時的には繁栄を見せる先住民部族もあった。一夫多妻の増加はその繁栄の証しのひとつとして指摘されているのである。しかし、1840年代に入り、カリフォルニアへの白人の移住が始まり、1846年の干ばつと牛の伝染病の蔓延も相まって、1850年代には飢えに苦しむ部族の様子が白人たちの記述に残されている²⁰。

4 このように、白人との毛皮取引に参入しバッファローに特化して暮らすスタイルが、バッファローの数によって生活の安定が脅かされることは、ある程度予測可能な事態とも言えよう。しかしバッファローは、実は部族の分散も招いていたために、こうした事態への警戒を発する長老たちの声⁴が十分活かされなかったのではないかと、今日の研究で指摘されている²¹。すなわち、バッファロー交易は、遊牧部族をバッファロー狩りに駆り立て、彼らに一時的繁栄をもたらしながら彼らをバッファローと運命を共にする暮らしへと導入させていったのである。その後19世紀後半の白人毛皮猟師たちの登場と大陸横断鉄道の広がり、さらにはフロンティア軍による先住民政策が、バッファローを絶滅寸前にまで追いやり、バッファローを生活の糧のすべてにしていた部族に致命傷を与える結果となったのである。

II. 大平原部族の文化変容へのポストコロニアル分析

以上、大平原部族が騎馬型バッファロー猟の遊牧生活を選択する歴史的経緯と、その暮らしの変化を概観した。その上でポストコロニアリズムの観点からいくつかの指摘を試みたい。まず大平原先住民部族のバッファロー特化の暮らしは、長年複数の生活の糧を持つことで暮らしを立てていくスタイルを採用していた先住民部族の歴史の中では異例と捉えるべきかもしれない。しかし依然変わらなかったこととして、バッファローに依存している以上、その自然の恵みを枯渇するまで搾取することのない利用の形態、すなわち動物との共存共栄関係を継続していたことは言えるはずである。それに対し、ヨーロッパ系アメリカの市場経済は、先住民を使ってバッファローを入手可能な限り入手し、最後には白人毛皮猟師たちの成すがままに任すという展開でバッファローを絶滅寸前まで追い込んでいった。そうした中で1874年と76年のバッファロー保護法案の議論では、バッファローは絶滅する運命にあるとする当時の古生物学者の見解を重視し大統領拒否権で廃案にするという政策をとっていた。これはまさにバッファローとともに大平原遊牧部族を死の淵に投げ込む行為と言わざるを得ない。大平原の開拓は、このように動物と人がともに死の淵へと投げ捨てられる「生権力」²²が行使された場であったとみる必要があるのではないか。

他方、もう一点、遊牧部族が多くのロープを提供していく中で、バッファローの毛皮をなめしてロープにする先住民女性たちの労働の重要性が増した一方で、女性の地位が低下したという従来の指摘についても注意を払いたい。地位の低下の根拠には一夫多妻の形態で、妻の数が増したこと、女性の結婚年齢が低下したこと、そして農耕時代との比較から女性の労働の自立性が失われたことがあげられている。しかもこうした動物と女性の劣位化については、「動物の権利」を擁護するフェミニストたちが今日の動物保護運動の中でも指摘している問題でもあった²³。しかし、例えば女性たちのロープ製作の過程を注視するならば、別の側面も見えてくる。

作業をする女性たちは一枚一枚丁寧に肉をとり、なめしていった時間をかけて丹念にロープに仕上げ上げていき、その作業に使うへらにはロープを一枚仕上げるごとにひとつの点を刻んでいくことで自己の技術の成長とともに自己確認を記録していったことが今日の先住民女性の間にも伝わっている²⁴。ここには毛皮とされる動物の生きていた証とも言うべき「血肉」とその「死」に真正面から向き合いながら精魂を込めて作業をする先住民女性特有の動物との関係が刻まれていたことを読み取ることができる。動物の「死」そのものに深く関与して自己の当事者性を確立していく先住民女性独自の動物との関係性がここに見出される。こうした先住民女性と動物との関わりは、白人中産階級の女性には吸収され得ない経験である。すなわち生きた動物を殺害して利用する歯車の中に確かに組み込まれているため、生かすことを大前提にする動物愛護とは全く異なる関係である。しかし「生」と「死」は、生きとし生けるものが必ず死を経験しなければならないという宿命にあることから考えるなら、動物の「死」に対座したこの先住民女性の動物との関わりも、動物と人との関係を考える上で見過してはならない重要な事例と言えるのではないかと。

むすびにかえて

多様な文化の存在するアメリカ社会において、先住民政策で見せた動物と先住民への「生権力」行使の歴史を踏まえると、人間社会が単純に人間中心主義であるなどと批判して動物のみを抑圧から救済する対象として議論することに懐疑的にならざるを得ない。とくに近代以降、ヨーロッパを中核とする植民地主義の時代、人間の中での境界線が差別的に引かれたことへの十分な分析と反省が、動物の問題を議論していく上にも不可欠だと思われる。動物と人間の関係が文化的に構築されたものであることから、動物と人間のあり方を議論していく上ではヨーロッパ系白人の提示する関

係性だけではなく、アメリカ先住民の経験から構築される関係を「不可欠な声」として聞き取ることが必要ではないだろうか。多文化社会アメリカにおいて、「白人中産階級の動物に配慮するフェミニストのとるべきスタンスは、例えば、先住民などの少数派文化と共存する肉食主義というスタイルをとる必要があるのではないか。

【註】

1. 詳しくはピーター・シンガー「附録 ドイツで沈黙させられたこと」P. シンガー著/山内友三郎他訳『実践の倫理 [新版]』, 401-425を参照されたい。
2. 詳しくは拙稿「暴力・女性・動物 —動物の権利」とフェミニズム『ジェンダー研究』, 5(2002年3月), 99-114を参照されたい。
3. 詳しくは拙稿“Vegetarianism; Animal Rights, Feminism, and Post-Racial Identity: Examining Debates over Ethic Foodways in the United States and Presenting New Perspectives,”『国際経営・文化研究』Vol.14 No.1 (2009年11月), 1-18を参照されたい。
4. 詳しくは以下を参照。William Cronon, *Changes in the Land: Indians, Colonists, and Ecology of New England* (New York: Hill and Wang, 1983), 34-53; Richard White, *The Roots of Dependency: Subsistence, Environment, and Social Change among the Choctaws, Pawnees, and Navajos* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1983), 1-33, 147-177.
5. Andrew C. Isenberg, *The Destruction of the Bison: An Environmental History, 1750-1920* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000), 31-38.
6. Cronon, 85.
7. Isenberg, 53-62.
8. Cronon, 82-92; White, 1-36.
9. Michael Williams, *Americans and Their Forests: An Historical Geography* (New York: Canbridge University Press, 1989), 149-157.
10. ルイスとクラークの探検日誌については、以下を参照した。明石紀雄著『ルイス＝クラーク探検 — アメリカ西部開拓の原初物語』(世界思想社, 2004)
11. White, 178-191.
12. John McDougall, *Saddle, Sled, and Snowshoe* (Toronto, 1896), 261, quoted in Isenberg, 66.
13. Isenberg, 66.
14. Christian Pfister, “The Early Loss of Ecological Stability in an Agrarian System,” in Pfister and Peter Brimblecombe, eds., *The Silent Countdown: Essays in European Environmental History* (Berlin: Springer-Verlag, 1990), 37-55.
15. Isenberg, 33-38; Robert H. Lowie, *Indians of the Plains* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1982), 13-16.
16. Theodore R. Davis, “The Buffalo Range,” *Harper's New Monthly Magazine*, 38 (January, 1869), 147-163; Catlin, *North American Indians*, Vol. I, 135; Sarah Ann Horn, *A Narrative of the Captivity of Mrs. Horn* (St. Louis: Kremle, 1829) in *Comanche Bondage: Beale's Settlement and Sarah Ann Horn's Narrative*, ed. Carl C. Rister (Glendale: Clark, 1955)
- 6 17. 女性の結婚年齢が低下したことについては Edward T. Denig, *Five Indian Tribes of the Upper Missouri: Sioux, Arickaras, Assiniboines, Crees, Crows* (Norman: University of Oklahoma Press, 1976), 153; Isenberg, 100.
18. アイゼンバーグは、ロープの加工に従事することが大平原部族の女性達の主な仕事となったことにより女性の仕事の自立性が失われたことを重視して女性の地位が下がったと論じている。Isenberg, 93-103.
19. Edward Douglas Branch, *The Hunting of the Buffalo* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1997), 72-73; Isenberg, 103.
20. 飢えに苦しむ大平原先住民部族については例えば次のような研究に詳しい。Hugh A. Dempsey, *A Blackfoot Winter*

- Count (Calgary: Glenbow-Alberta Institute, 1965), 12; Henry A. Boller, *Among the Indians: Four Years on the Upper Missouri, 1858-1862*, ed. Milo M. Quaife (Lincoln: University of Nebraska Press, 1973), 35.
21. 部族の分散については以下に詳しい。John H. Moore, "Cheyenne Political History," *Ethnohistory*, 21 (Fall 1974), 340-341; Donald J. Berthrong, *The Southern Cheyennes* (Norman: University of Oklahoma Press, 1963), 3-99; Edward Adamson Hoebel, *The Cheyennes: Indians of the Great Plains*, 2d ed. (New York: Holt, Rinehart & Winston, 1978), 9-10; Frank B. Linderman, *Pretty-shield: Medicine Woman of the Crows* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1972), 20-21; Denig, 134-135.
 22. 例えばイタリアの哲学者 J. アガンベンは、M. フーコーの「生権力」の議論をさらに深めてナチスドイツのユダヤ人強制収容所についての問題性を新たな角度から議論している。ジョルジョ・アガンベン著／上村忠男他訳『アウシュヴィッツの残りもの — アルジーヴと証人』(月曜者, 2001)
 23. 詳しくは、拙稿「暴力・女性・動物 — 『動物の権利』とフェミニズム」を参照されたい。
 24. 例えばラコタ族の女性達については以下を参照した。阿部珠理著『アメリカ先住民の精神世界』(日本放送出版協会, 1994年); ダイアナ・ステリア著／鈴木清史他訳『アメリカ先住民女性—大地に生きる女たち』(明石書店, 1999)

(受理 平成26年11月29日)